

「視覚障がい=全盲」とは限らない

令和4年の「生活のしづらさなどに関する調査(全国在宅障害児・者等実態調査)」(厚生労働省)によると、視覚障がい者は全国に約27万人いると推計されています。生まれつきの方もいれば、事故や病気、加齢により後天的に見えなくなる場合など、原因はさまざまです。

視覚障がいというと、目が全く見えない「全盲」を思い浮かべる方も多いと思いますが、実は全盲の方の割合は、視覚障がい者全体の1割ほどです。残りの9割の方は、全く見えない訳ではないものの、見えにくく、治療や矯正をしても日常生活に支障がある状態で、「ロービジョン」と呼ばれます。

見えにくさの例

見えにくさは個人によって異なります。視野の一部が欠けたり、ものがゆがんで見えたりすることもあります。カンピくんを例にすると、以下ようになります。



通常視力
(はっきり見える)



ぜんもろ
全盲
(全く見えない)



しやきょうさく
視野狭窄
(見える範囲がせまい)



ちゅうしんあんてん
中心暗転
(真ん中が見えない)



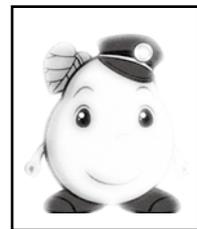
きょうど きんし
強度近視
(ぼやける)



はくだく
白濁
(白くにぼる)



へん ししゅう
変視症
(ゆがむ)



しゅうめい
差明
(まぶしい)

ロービジョン

わたしたちができること

①見守る

視覚障がい者の方が使っている「白杖」は、路面の状況を確認し、障害物にぶつからないようにする機能だけでなく、自身が視覚障がい者であるということを、周囲に知らせる効果もあります。

外出時、白杖を使っている方が近くにいた場合、むやみに声をかける必要はありませんが、ぶつからないように距離をとったり、危険がないか見守っていただければ幸いです。

また、盲導犬と一緒に歩いている場合も同様です。盲導犬はユーザー(視覚障がい者)の身体の一部なので、勝手に触ってはいけません。そして、盲導犬は基本的に人が大好きです。かわいいからと言ってじっと見つめると、「遊んでもらえるかな?」と勘違いをして、「お仕事」に集中できなくなるかもしれません。

右のイラストのように、ハーネスをつけている時は「お仕事」中です。視界の片隅に入れて、心の中でそっと「おりこうさんだな」とほめてあげてください。

②点字ブロックをふさがない

点字ブロックにはいくつか種類があり、進行方向や危険な場所などの情報を、白杖や足裏の感覚で読み取れるようになっています。物を置かないようにしましょう。



③SOSサインに気付く

困っている様子が見られた時は、いきなり身体に触れるのではなく、まずは「何かお手伝いしましょうか?」と声をかけてください。特に、右のイラストのように白杖を掲げて持っている場合は、SOSのサインです。なお、目の前に危険が迫っている緊急時には、腕をつかむなどをして、安全確保をお願いします。

